

発達を見る眼をゆたかに、 おおらかに

第4回 4歳児らしさを 尊重するかかわり



鳥取大学
寺川志奈子

てらかわ しなこ／鳥取大学地域学部。研究テーマは「子どもの自我、自己、および社会性の発達と教育的支援」について。共著に『自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価1 子どもの「ねがい」と授業づくり』（クリエイツかもがわ）など

絵を介して子どもの思いを聞く ――描きナガラ経験を語る4歳頃――

左の絵は3歳11カ月のなっちゃんが、黄色のクレヨンで描いた絵です。何を描いたのでしょうか。子どもの絵を見る時、大人は「これは何？」と尋ねると思います。それは大人が、子どもが何かの事物をそこに描いたものと考えているからです。けれども、子どもが描くプロセスをていねいにみてみると、幼児の絵には何かの事物を描き写しただけではない、その年齢らしい思考のあり方や、その子らしい豊かな意味の世界が展開していることがみえてきます。なっちゃんは、傍で見てくれている先生に、こんなおしゃべりをしながらこの絵



を描き上げていきました。

「○○パーク行った電車描く。電車長いからこうやって。窓も描こう。窓いっぱい。長い電車でしょ。こうやってね、ほんでこっち行ったり。こうやって窓いっぱいになってな、ほんで鯉のぼりみたいになっちゃった。……こんなの描いた。雨つくってる。これがな、こびと。だって雨降ってたもん、昨日。ほんで、鯉のぼりのここにな、棒にするねん。これが芯で動く。……赤ちゃん鯉のぼり描いてあげようか。これ赤ちゃん鯉のぼり。電車にこんなの（パンタグラフのこと？）あるねん。鯉のぼりの目、つくらなあかん。……」

そこには絵を見ただけでは、思いもつかないイメージが展開していました。遊園地に行った時の電車を描き始めたなっちゃんは、窓を描き加えたり、「こっちに行ったり」と描線や手振りで電車の動きを表現したりしています。かと思うと、電車のつもりで描いた形が鯉のぼりに見えてきたようで、今度は鯉のぼりのイメージが広がっていったり。そしてまた電車のイメージに戻っては、行った遊園地のこびとやその時の天気のことを思い出して描いたりといった様子でした。描きナガラ、その形から次の新たなイメージがひろがり、そのイメージを言葉にしナガラ、また次のイメージが浮かんでくる、といった具合に、なっちゃんの描画は、その意味も、その世界の時間も自由自在に動いている感じでした。そして、その描画は、描かれた図的なものと、話しことばと、身振りが補い合うようにひとまとまりとして、ひとつの表現になっていたとみることができそうです。何より先生が傍で見て

聞いてくれているからこそ、描画を介してなっちゃんの経験や思いが語られる対話の場になっていたと言えるのではないのでしょうか。

4歳頃の絵は、結果ではなく、描画と、話しことばと、身振り、それら全体の表現として、そのプロセスを受けとめることが大切であることがわかります。そして、そこで語った自分の経験や思いを、「そうだったんだね。すてきだね」「楽しかったね」と、それらをまるごと大人に受けとめてもらう経験は、4歳頃の子どもにとって、確かな自分というものをかたちづくっていくことにおいて、大切な意味をもっていると考えます。

正解のない「楽しさ」――4歳頃の移ろう意図――

次のページの2枚の絵は、「今日の楽しかったプールの絵を描こう」というテーマで、同性同年齢のふたりの子どもと一緒に描いた共同画です。図1は5歳後半の女兒ふたりで描いた絵、図2は4歳後半の男児ふたりで描いた絵です。5歳児の方はプールの絵として一枚のままとりのある絵に仕上がっています。一方、4歳児の方は太陽が2つあったり、魚やカニ、カメ、さらには仮面ライダーまで描かれていたりして、「今日のプール」の絵からは随分と飛躍した内容も描かれています。これらの絵のちがいは、それぞれの年齢の思考のあり方や、友だちとの関係のつくり方のちがいを反映しているともみることができそうです。

5歳半頃には新しい発達の力が生まれ、子どもは、すじみ